

口語詩句投稿サイト72h

ことばの力詩集

2026年6月 第68号

口語詩句投稿サイト72h



ことばの力詩集

2026年6月 第68号

選者

暮田真名（川柳人）

3

小島なお（歌人）

10

杉本真維子（詩人）

16

高橋修宏（俳人・詩人）

22

立花 開（歌人）

31

西躰かずよし（俳人）

39

林 桂（俳人）

48

龍 秀美（詩人）

65

暮田真名 選

ほしはかせ
(群馬県)

花冷えて

土曜

どんより

インド洋

音の近い「土曜」「どんより」「インド洋」の三単語が隣り合う（「インド洋」の中には、「土曜」がある）。お花見をしたいのにあいにくのお天気……という日常の風景から、曇天のインド洋に飛ばされるのが楽しい。

塩崎誇一
(埼玉県)

曇天に葉桜添えてさようなら
ガソリンはまた値上げらしいよ

上句が良い。太陽は隠れ、花は散ってしまった。そのことが、「さようなら」の喪失感を増している。句切れごとに風景が切り替わっていくようなリズムも良い。下句は日常に忍び寄る終末をほのめかしている。

若山かん菜
(神奈川県)

でもここは近道じゃない
「地下道」を「ちかみち」と読む
雨の日の朝

しかし、地下道が本当に近道であることも多いのではないか、などと考えるうちに、道は単に目的地に着くためだけにあるのではないということに気がつく。都市に根のように張り巡らされた地下道に想いを馳せる。

堀田じろう

(岐阜県)

湯船に浸かって

小学校、中学校、高校の

校歌を順に歌います

小中高の校歌を順に歌うというのは、十二年分の時間を校歌を三つ歌う分の時間に圧縮するような、不思議な時間操作を行っているように感じる。小学生、中学生、高校生の主体が三人並んでいるようでもある。

中原ららら（神奈川県）

初めてじゃないことをしよう、

ふたりで

「初めてのことをする」というロマンは一度きりのものである。あとは灰色にくすんだ「初めてじゃないこと」が続いていくだけ。こうした諦念を、「しよう／ふたりで」が振り払ってくれる。いわば、前向きな逆張りである。

中矢温（東京都）

白湯で暮らして なわけ

んなわけ そんなわけ

歌うような「なわけ／んなわけ そんなわけ」に心を

天野奏 (埼玉県)

惹かれた。「白湯で」の「で」は、①場所と②手段の二通りの読みが考えられるが、どちらにせよ、俗に言う「ていねいな暮らし」を彷彿とさせる。だからこそ、「なわけ／んなわけ」なのではないだろうか。

肉体と心を単三電池みたく 外せば五月の晴れの静けさ

「肉体から心を外す」とも、「肉体も心も外す」とも読める。わたしは後者の読み筋を好む。単三電池は二本で用いることも多い。肉体も心も取り外したのちになお残る魂のようなものに、五月の風がすうすうと吹きわたる。

櫻川佳子（愛媛県）

美しい猫に見惚れて君となら
結婚してもいいよ今すぐ

はじめは「美しい猫」を飼っていることに免じて、その飼い主となら「結婚してもいい」のだと読んだ。そしてすぐに、「結婚してもいい」対象は「美しい猫」そのものだと思い直した。自由を追体験させてくれる一首。

極致 | A（東京都）

生まれてくる性を間違えました
消えないポップアップ広告

言葉通りに読めば、性別違和について書いてあるのだ

Kamome

(京都府)

と思う。どこへ行くにも、なにをするにもつきまとう
「あなたの性別は？」という問いを、「消えないポップ
アップ広告」に例えたところが巧み。

トランプを吐き出しそうな墓

鳴いているヒキガエルの喉が震えているのを、口の中
いつぱいにトランプを溜め込んでいる様子に喩えた。
禍々しい生命感を持つヒキガエルが、とたんにプラス
チックのおもちやのように見えてくるおもしろさ。

小島なお 選

太朗千尋
(東京都)

ほんとうにごめん
エアコン味のグミ

エアコン内から排出される空気のような味のするグミ。絶妙な形容によってもうそのグミの味は定まってしまった。全方位への「ほんとうにごめん」。

豊代一緋
(石川県)

能面と

空が

おんなじ顔をして

あなたも猫も帰ってこない

しんと動かざるおもての奥処に幾多の感情が秘められた能面と空。生きている地上からでは見ることの叶わない襷に大切な存在は吸われてしまった。

牛田悠貴
(東京都)

遺失物センター兼ねて歩き出す

遺失物センター兼わたし。これまで出会ったひとびと

の忘れ去られた過去や声の集積として。いつか私へ取り戻しに尋ねてきてくれるひとを待ちながら。

岩本遥 (東京都)

満月にめりこみながら手をふった

手を振る背景に月が出ていたのだろう。「さようなら」とか「また」と手を振った直後から急速に他人になる。速度を伴ってぐんぐんと果てへ遠のく。

垂々 (埼玉県)

今私うたた楽しく生きていて
お豆腐こわいほど賽の目で

ますます楽しく生きはじめた私にとって瑣末な日常で

さえ鮮烈。「うたたたのしく」とつんのめる韻律で、
六面真つ白な豆腐のサイコロで運命を決める。

机 (京都府)

首の骨の

軋む音のひとつですらも

再演

シェイクスピアは「全てこの世は舞台、人はみな役者だ」と言った。頸椎ひとつの音さえも望まれたアンコールだとしたら、最期の瞬間まで喜んで応えたい。

榎本圭子 (大阪府)

草餅に添付のきな粉かけず食う

馬は荒野を駆け巡る

赤井富身野

(東京都)

荒れ野を疾駆する馬は、素朴な草の香りから体感された存在とも、我流を貫く自己の象徴とも。枯野をかけ廻る芭蕉の夢ならぬ馬の脚にきな粉の砂埃が舞う。

スキー板人にぬがされ

大の字を探る

スプリットタンになりたい

ゲレンデに大の字に転がる自分を俯瞰の視点で映す。スキー板によつて無理矢理広げられた両脚を、雪上のスプリットタンとして眺めるまなざし。

夏山栞
(東京都)

ひとしきり臓器に雨のふるような

主訴もてあます 胡瓜を囓る

臓器ひとつひとつを雨が濡らすような症状。詩的な主訴は医療の場ではきつと通じない。胡瓜を囓ることです。いつそう雨が降りそうに思えてならない。

潮田央
(東京都)

くたにやき

延命措置はめくるめく

現代医療における延命治療のあらゆる手段。久谷五彩で絵付けをされた器の絢爛さと、寿命を一日でも引き伸ばすためのめくるめく措置の眩しさの底の暗さ。

杉本真維子 選

塩見倅
(沖縄県)

ふりかえったら国がなかった

これは急速にリアリティをもった言葉、なのではなく、以前からこうなのだ。とりわけ「ふりかえったら」が効いているだろう。

花田港
(東京都)

改札をしゃぼん玉あふれるように

改札からおおぜいの人間が押し出されてくる様子と吹き出し口から出てくるシャボン玉の様子が重ねられて

いる。改札のほうはどちらかといえばネガティブな光景だが、シャボン玉と重ねられることで人間の肌のかがやきが見えてくる。

川瀬十萌子（茨城県）

公園の背骨をついに掘り当てる

背骨のごつごつした感じを生々しく想像させる。どこに、どのようにして、掘り当てたのかを知りたくなる。

Kamome（京都府）

夏の木に触れていた手が

夕ぐれの小に浸している手と

気づく

この「手」とあの「手」の間に時間がある。それが見

えた瞬間のことが書かれているようだ。

雲理そら
(大阪府)

責任があるから立っている四月

年度初めのすがすがしい緊張感。「四月」の表記の四角形の安定感も効いている。

佐藤橙
(鹿児島県)

蝶だけの図鑑閉じてよ今すぐに

「今すぐに」図鑑を閉じなければ、蝶が飛び立ってしまいうそう。すさまじいリアリティだ。

金井晶
(宮城県)

いつまでも愚かでいたい

道のあるほうだけ光る夜の公園

夜の公園がひっそりと秘密を守っている。片側だけ影になっているところがいい。すべてが見えるわけではないところがいいのだと思える情景。

中原ららら
(神奈川県)

鼓膜の隙間から

淋しさ入らないように

耳を塞ぐ

ちいさく、ちいさく

聴覚の敏感さとコントロール不全のあやうさを鋭く示唆している。幻覚より幻聴のほうが先に症状にしやすい。

田畑味 (東京都)

人間をたくさん産んでバスの客

大勢の人々の降車の様子はバスの出産のよう。バスが生き物であつても本当はおかしくないのだ。

汐見りら (東京都)

ひんと読まれるとき

浜はうれしそう、みたく暴いて
春のころは

白鳥陽太
(神奈川県)

「春のころは」…何でしょうね。「ひん」は明るい音感の一方で、ひんやりとした響きもあり、たしかに一筋縄ではいきません。

嫌いな人が手を洗っている

「嫌いな人」を見るまなざしに、じくじくとした痛みがある。手を洗うすがたは、誰であっても、正しく、尊いものだろう。。

次回も楽しみにお待ちしております。

高橋修宏 選

豊代一緋（石川県）

能面と

空が

おんなじ顔をして

あなたも猫も帰ってこない

無表情、あるいは表情が捉えがたい「空」を、「能面」の比喻で表現したことが秀逸。四行目への飛躍も、意表をつく。

いまはじまるの

(兵庫県)

降りられない船に乗っている。

日々だ。

いち早く、時事的な事象を作品化したのだろうか。そう言えば、コロナウィルスの時も、世界一周を謳う大型豪華客船からパンデミックが始まったことを思い出す。また、「降りられない船」とは、現在の地球自体のアレゴリーかもしれないが……。

ほしはかせ
(群馬県)

桜薬降る

扉

軋んで

不在証明

四行の多行形式の俳句として読んだ。この不在証明とは、誰のことなのだろうか。すでに空家となった「扉」でありながら、「桜薬降る」の斡旋により、そこはかとなひ華やぎも感じさせる。

田邊辺
(茨城県)

ら

ら

落花

ねこはたのしいからねむる

何より、文字の表記が面白い。一見、たわいもない日常の光景のようだが、グラフィカルな文字表記と相俟って、メルヘンのような「ねこ」の気配も伝わってくる。

高田皓輔（千葉県）

あたたためて忘れたレンジに

思い出の

ようにミルクはぬるいままある

失意なのか、別離なのだろうか。刻々と過ぎてゆく時間の経過を、「ミルク」によって形象化させた作品。「ぬるいままある」によって、微かな時間の出来事であることも伝わってくる。

雲理そら（大阪府）

叫んだら壊れるようになって

ロボットと同じだから社訓は

深町明 (福岡県)

痛烈なアイロニーが光る作品。「叫んだら壊れる」という振るまいも、「ロボット」という事物も、わたしたちの現在地における危機を指し示すようだ。

春はあけぼの濛々と饅頭屋

『枕草子』の冒頭の一節を引用しながら、天象から人事へと脱臼させた一句。「濛々と饅頭屋」が、どこかレトロな気配をまとうのも面白い。

にわ (栃木県)

ふわふわのテトラポッドは
なみにのり

あなたの街ですこしふえるよ

天野奏 (埼玉県)

「ふわふわのテトラポッド」とは、何なのだろう。テトラポッドと言えば、コンクリート製の堅固な存在だが、ここでは「なみにのり」、「すこしふえる」存在として記されている。そんな騙し絵めいた謎の「テトラポッド」が気になる。

肉体と心を単三電池みたく 外せば五月の晴れの静けさ

批評的なユーモアを感じさせる一作。もはや、わたしたちもロボット化しているのだろうか。「五月の晴れの静けさ」を忘れてしまうほどに……。

y o h e i
(東京都)

雨だね、という。値段を見ずに

短詩のようでありながら、どこか小説のワンシーンのようでもある。考えてみれば、わたしたちの会話自体、そんな不条理な飛躍に満ちた世界であるのかもしれない。

常田瑛子
(山口県)

秋という季節は長い首を持つ
生き物の影が見ている夢

「秋という季節」をめぐって、こまやかな屈折によって形象化した作品。その幾重にも反転するような修辭から、あの有名な莊子の〈胡蝶の夢〉のエピソー

ドも想起させられた。

立花 開 選

中原紘 (山口県)

バウムクーヘンの外側になるとき
必要なのは勇氣じゃないね

自身の意志より、押し出してくる数多の手の形を感じてしまう。「勇氣」とは自分で選ぶこと。意志を持ってバウムクーヘンの外側になったわけではなくて、甘ったるい層の中にいたかったのに、最後まで残され「外側」になってしまった。

全美 (神奈川県)

コピペだらけの鰯雲

佐藤橙
(鹿児島県)

鱗雲はどこまでも広がって、果てが見えない。ほぼ同じ形の雲が連なっているが、何かの手によつて大量にコピペされているのかもしれない。すべてオリジナルで作られていたらなるほどたしかに大変だもんな…。そう見ると、なんだか価値も少しだけ薄れる。

朝焼けがまるで生前葬みたい

先に死んでおく。そうすれば、何が起きようと死後の出来事になる。朝焼けが何も汚れない一日の始まりを焼いていく。汚れを知る前に死んでしまえばこれから先も汚れない。しかしそれは果たして救いなのか。

くらたか湖春（滋賀県）

はじめての海に会うまで

クレヨンの長さは

ぜんぶおなじだったね

海に出会ったとて本当の海は描けないが、出会ってしまつたら描かずにはられないのが海だ。呼びかけの柔らかさに主体にとって愛おしい対象なのだろう。おそらく幼児であると思うが、海を見た感動に青色のクレヨンを使い続ける。

石村まい
(兵庫県)

道具がかわれば動詞がかわる

暴力の

どこまでもぬかるむ春の土

バッドなら殴る、包丁なら刺す、たしかに動詞がかわることにはつとさせられた。それほど暴力はこの世にたくさん存在するのだ。例をあげないことでまるで多くの暴力に触れてきたかのような臨場感を読者に伝えてくる。

青木菓子
(兵庫県)

タウン誌を下敷きにして

書いた遺書

大西美優 (広島県)

働くことは生きることだ。タウンワークには大量の就職先が掲載されているが、紙媒体での発行は二〇二五年に休刊している。それより求職活動はしていないのかもしれない。下敷きにするにはあまりに分厚いタウンワーク。すべてがその時の間に合わせて済ませる。死ぬことも同じ。

豆の花

スカートのままねむる日も

スカートのまましてしまう寝落ちほど嫌なものはない。寝ている間にずり上がるし、生地は傷むしアイロンを当てないともう履けない。けれど、一輪の花

桜庭紀子（和歌山県）

のようにまどろむ姿は甘やか。スカートの皺が寄り集まって蕾に、広がって満開に、エロティシズムを引き寄せる。

コピー紙が
さみしいからと
のせる柚子

無機物に自己を投影する作品は多いが、真っ白なコピー用紙の上にくろんと置かれた柚子は明るくもあり、存在が際立つからこそ孤独であることが浮き彫りとなる。静止画のようでありながら時間は流れ続ける。さみしさという点のような存在。

佐藤橙
(鹿児島県)

触れたいと願ってしまふことの
比喩

感情を何かに喩えるのは、素直にその想いを言えない
何かがあるから。喩えた先は何だろう。せめて美しい
ものに喩えていてほしい。「比喩」と体言で結び、無
数の言葉への繋がりを見せる。触れたいと伝えるより
心は自由なのかもしれない。けれど、縛られてもいい
から触れたいのだ。

瀬斗みゆき
(岡山県)

桜餅ひとつのための形の手

手は一番用途が多く、どのような形にもなれる。限定されるということは他はできなくなるということだ。桜餅は頻繁に食さない故に、普段の手は無能な存在となる。繊細なものを掴むだけの愛おしい存在となる。

西躰かずよし 選

極致
| A (東京都)

生まれてくる性を間違えました
消えないポップアップ広告

「生まれてくる性を間違えました」という広告。それは語り手にとつていいようのない棘となる。何故それを間違いと言わなければならなかったのか。何故それが認められないのか。ジェンダーの痛みと言うには、あまりに単純に整理されてしまう痛み。機械的に表示されるポップアップが、こたえのなさを表す。「せかいの青が／すいこまれたようながめん／主電源を長押

鱈 (石川県)

し、再起動」も同じ作者の作品。いずれの作品からも、ぎりぎりの場所からの抵抗を感じる。

春眠と

経血の海のみこんで

16歳はぬいぐるみ抱く

春眠と経血の海をのみこむもの。それは、若さのなかにある未熟さや残酷さを表すのだろう。主人公が「16歳」という対象化されたものとして描かれていることを考えると、おそらくこの物語は過去のものとしてある。けれども、それらが過去のものになつてしまうことのおそろしさを、いちばんわかつているのも、語り

手自身だろう。だから、ぬいぐるみを抱く。その痛みを忘れないように。

軽居とどめ (東京都)

観測を逃れていちご味の雲

いちご味や、観測という幼年期に用いられるであろうことばが、擬人的な表現を説得力あるものになっている。雲が観測を逃れるということ。食べられる対象として雲が描かれるとき、いつもは忘れていることを思い出す。そこにある加害と被害の関係。だからこそ、そこに生きる、いちご味の雲がいつそうまぶしい。

田邊 (茨城県)

テトラポッド春の白さのレジ袋

ムクロジ (群馬県)

レジ袋の白を春の白さと言う。それは、ある意味ありきたりかもしれない。しかし、使い物にならないレジ袋に、春の白さを見出したところに、この作品のすべてがある。そしていつか僕たちは、使い物にならないレジ袋に自身をかさねる。だからだろう。汚れたレジ袋が、春の白さを帯びることに感動を覚える。

すこしずつ

雨たまりゆくチューリップ

作品は、俳句の写生という方法をふまえながら、新しい口語のかたちで表現される。切れとなる行替の余白によって、雨のたまりゆく花が無時間性のなかに置か

秀島由里子 (広島県)

れるとき、それらは永遠にも見える。チューリップはチューリップで、そのままに美しい。「キツチンカーは／いつも止まっていて／落花」も同じ作者のもの。こちらも同様の印象を受ける。

チューリップ

ちよつとぷっくりする乳房

チューリップを見たときに感じる乳房の張り。そこにながれるおだやかな時間。チューリップにも乳房にもやどる、それぞれのいのち。「ちよつとぷっくりする」という一節に、語り手のまなざしを感じる。ちいさなものへつながる、あたたかなまなざし。

睦月雪花（愛知県）

おさなごを抱いて揺らせば

「うみみたいだね」と言われて

海になる腕

ことばは、呪文だから、何かを言われたら、そのとおりになるのかもしれない。でも、「うみみたいだね」と言われた子を抱く腕が、実際に海になってしまふまでには、かなりの距離がある。おそらくその距離こそが、書き手の描きたかったものののだと思う。いのちのおもさ。うみとなる厳肅さ。さまざまな解釈が読者に委ねられる。そしてそこには、それぞれの物語がある。

なかむらそう (長野県)

おばけにも

ほ

く

ろ があつておこづかい

ことばあそびうたのような作品。かな表記と、行替えによる愛らしいリズムが、かわいらしいおばけの様子を伝える。おばけもまた、僕たちと地続きの存在で。ほくろもあつて。おこづかいもほしくて。だれのなかにもいる、おばけの友だち。

花田港 (東京都)

ぶらんこの夜を手紙の書き出しに

佐久間にのひと

(東京都)

ぶらんこの夜というのが気になる。少なくともそれは、お金を稼ぐとか、人の役に立つといったものではないと思う。もともとぶらんこ自体は、あそびのためのものだから。それは、なんの意味をなさないものなのかもしれない。でもだからこそ、その手紙はやさしい。

唇に届きそうなほど白い雲

唇に白い雲が届く。それは自然と語り手がひとつになる瞬間なのかもしれない。そんな雲の白さ。見上げる雲に思いを馳せて。遠くまで。遠くまで。そこに残るあこがれへの予感。

石村まい
(兵庫県)

てざわりがかたちをつくる

眩しさへ

きいろい犬のまぼろしが来る

幼年期までつづくような黄色い犬のまぼろし。それはきつと、はかなさを帯びるものに違いない。それでも語り手は、まぼろしが来る眩しさへと近づこうとする。それは、普通なら零れてしまう手ざわりが、何かの拍子にかたちになるという、必然にも似た瞬間を表している。だからこそ、犬のまぼろしは、まぼろしのままかけがえないものになる。

林 桂 選

中矢温（東京都）

ポケットに蛭を飼っている真顔

「真顔」をどう読んだらいいのか。惑わされる。種明かしをされているようでもあり、はぐらかされているようでもある。このポケットの持ち主をどのようにに想像すればよいのだろうか。なかなか顔が見えてこない。

マズルカ（茨城県）

これが郷愁なのですか
ふと思ひ出すのが
競馬場であつても

うたた (京都府)

作者には、幼い日、両親に競馬場に連れられていった記憶があるのか。地元のオートレース場は、ファミリー向けのサービスがあつて、子どもを連れて休日を楽しめる工夫をしている。競馬場にもあるのかもしれない。そこに思い出があれば、競馬場も郷愁の場となるだろう。若い日に知った同世代の詩人は、自分の誕生の地を拒否していた。その詩人のふるさとは、崇敬する詩人の詩文の中にあるらしかった。「作者」の競馬場もそうなのかもしれない。

赤ん坊の香りだ 山が夏になる

若葉、青葉に満たされた夏山の香しさ。それを「赤ん

坊の香りだ」という。新たな命の香は、どこか似通うものか。

くらたか湖春（滋賀県）

こういうところなんだと思う

振られてもきちんと量っている

バスロマン

日常的なルーティンと、時に訪れる非日常的な出来事との二層を、私たちは生きているのだと知る。入浴剤のバスロマンをきちつと定量入れるという日課は、たとえば「振られ」て心揺らぐ時も、変わりはない。「こういうところなんだと思う」のだ。

ムクロジ（群馬県）

キッチンカーは
いつも止まっていて

落花

桜祭りなどの催事に出没しているキッチンカー。「いつも止まっていて」に作者の目がある。私たちが目にするのは、いつも止まって開店しているキッチンカーの姿である。ここまで移動してきたに違いないが、その移動の姿を目にすることはない。気が付けば、いつも止まっていて。そんなふうにしてキッチンカーはいる。

睦月雪花（愛知県）

おさなごを抱いて揺らせば

「うみみたいだね」と言われて

海になる腕

「海になる腕」がいい。おさなごを手には揺らしているときには、「作者」には何のイメージもなかったのだが、それを「うみみたいだね」と言われた途端に、「作者」のイメージもそれに追いつく。

大西美優（広島県）

豆の花

スカートのままねむる日も

深谷健 (埼玉県)

活動のエネルギーの配分を考えずに動くので、子どもは電池が切れたように突然眠る。「スカートのままねむる日も」は、そのような幼年時の姿だろう。

神様はいないしゼリーだし僕ら

信仰心が厚い人には神は存在するが、基本的に信仰心の薄い日本人には、「神様はいないし」は真理を述べているように受け止められるだろう。しかし、「ゼリーだし僕ら」は、受け入れられない。だが、「作者」は神様はいないのと同じ真理として受け止めることを迫ってくる。神を信じない僕らはゼリーだったのかもしれない。

石村まい
(兵庫県)

歯牙すべて閉じられている

朧夜の端から端まで銀を咥えて

「何かを読み取れていますか」と聞かれれば、「はい」とは言えない。歯牙に掛けるには、口を閉じていてはいけない。歯牙を持ちながら、敵を倒す意思はないというのだろうか。ただ「朧夜の端から端まで銀を咥えて」の美しい詩句に惹かれるのだ。

ほしはかせ

(群馬県)

遠く母子

昔

昔の

春霞

一読、高屋窓秋の「海割れるかな／父泳ぐかな／母子暮らし」(句集表記は空き字の一行表記だが、色紙での表記は、／で改行を示したような多行表記)を思い出した。父は神なのかもしれない。還らぬ旅人かもしれない。船長かもしれない。ただ、その帰りを待つ母子の暮らしがある。そんな句だろう。ここでの作品は、その続編の趣きである。父は遂に帰らずじまいだったのだろうか。

背腹颯太
(北海道)

犬なりの公式があるけど誤答

猫には恐らく正答がないから誤答もなさそうだ。しかし、人間と正対する犬は人間の思いをおもんばかることができる。犬なりのリアクションをする「公式」がある。しかし、人間との答え合わせでは「誤答」となってしまう。犬を愚かと見るか健気とみるか。ことは犬のみの問題ではなさそうだ。川柳体の作品。

白鳥陽太
(神奈川県)

はるじおん

はるじおんと

言うばかり

金井晶 (宮城県)

「はるじおん」は春紫苑。花の名前だ。よく目にする雑草だ。「はるじおん」のリフレインは、繁茂する花を数えているようでもあるが、繰り返す言うことで、花の意味を離れて呪文のような響きが生まれている。「はるじおん」。不思議な響きだ。

いつまでも愚かでいたい 道のあるほうだけ光る夜の公園

夜の闇が降りた公園も、歩道沿いだけには街路灯が点っている。それが「いつまでも愚かでいたい」という想いと結び、その比喻のように見えているのだ。

夏山葉
(東京都)

麻シャツのようなすすしき

記念日をひとつも持たず

暮らしてみれば

物を持たないシンプルな生活を心がける人がある。それを内面に及ぼせば「記念日をひとつも持たず」ということになるのか。「麻シャツのようなすすしき」の比喩に惹かれる。麻シャツは夏の季語にも立てられている。

小西電波
(北海道)

寝不足のまま風船を割る仕事

榎本圭子 (大阪府)

常識的に「風船を割る仕事」は存在しない。仕事の意味をなさないと思えるからだ。しかし、「寝不足のまま」の仕事の経験は誰もあるだろう。そもそも、私たちの仕事に意味があるのか。あるいは私たちも「風船を割る仕事」をしているのかもしれない。川柳体の作品。

垂乳根の母は施設に一人住み

今も私の才信じてる

母は老人介護施設に入所しているのだろう。「今も私の才信じてる」は、なんとも切ないが、母というものの本性を言い止めているだろう。母は子を信じるのである。

鈴蘭
(新潟県)

はじめての土地
すこし眩しくて
うまく歩けない

新たな地で、新しい生活を始めたときの感覚を、「すこし眩しくて」というのだ。新しい街はまず方向が分からない。眩しいばかりだ。この一編に、新たな街で、風邪薬を買いに出て、一時間彷徨った経験を思い出した。

津崎一加
(京都府)

おどしに
付けたきびだんごだとおもってた

川瀬十萌子

(茨城県)

あるあるネタではあるだろう。幼年時に歌詞の意味を良く知らないうちに歌うことになった童謡などには、子どもなりの解釈が生まれる。「うさぎ美味し」(故郷)や「追われてみたのは」(赤とんぼ)や「いまこそ分かれ目」(仰げば尊し)など、云々されている。この桃太郎の「おどしに／付けた」は初見。「お腰」などという言葉は子どもの世界にはない。精一杯の解釈だ。長じて分かることに違いないが、子どもの頭の中で回っていた想像が愛おしくもある。

幽霊はとてもしいけつ

襟首の真つ白いシャツ

さみしく光る

蒜屋すみ (宮城県)

「幽霊はとてもせいけつ」という視点で、幽霊を想像したことがなかったので、意表を突かれた。たしかに幽霊は清潔かもしれない。幽霊が持つ恐ろしさには、こんな感覚もあるのかもしれない。

いつもより

強めの缶チューハイを買い

号泣の手筈を整えた

泣きながら律儀に辞書を引いて日記を書いている弟妹の姿を描いた作品をどこかで読んだ気がする。この作品も同種だろう。ただ、この作品は俵万智の『嫁さんになれよ』だなんてカンチューハイ二本で言っ

甘酢

(神奈川県)

てしまつていいの」を踏まえているだろう。恋の終わりを受け入れるためにも、缶チューハイの準備が必要なのだ。

友達になつたその子は
ロールケーキのような明るさ

「ロールケーキのような」の比喩に一瞬くらむ。ロールケーキのような明るさとは、どんな明るさだろう。ただ、ロールケーキは明るいものだという印象ばかりが強く残る。

赤井富身野

(東京都)

青竹よそんなおもしろい生え方を
したらずっとおもしろい奴だぞ

萩原朔太郎の「竹」を踏まえているのだろう。作者は、朔太郎の詩のテーマとは違うものを見つけてしまったのだ。確かに確かに朔太郎の竹は、「おもしろい生え方」と言えなくもない。

龍 秀美 選

貴田雄介（熊本県）

おしつこが近い
職場は遠い春

「近い」と「遠い」が前後の言葉に複雑に掛って面白い効果がでている。おしつこは近いのに、職場からトイレは遠いのか。まだ寒く、春は遠いのでおしつこが近くなるのか。

塩見侔（沖縄県）

ふりかえったら国がなかった

佐藤橙 (鹿児島県)

大敗にも関わらず国を失わなかった日本に住んでいると、急に国が無くなる経験は実感が薄い。しかし、世界にはそういう経験をした人がたくさんある。振り返る一瞬を百年と捉えることもできる。

びしょびしょの犬になんとか
ついでいく

水を掛けられたのか雨に降られたのか、犬はびしょびしょ。引つ張っているのか引つ張られているのか付いて行くしかない。義理とかやむを得ない事情もある。現在の国際状況をふと思う。

植田遥大（神奈川県）

ドリンクバーは
どこか不衛生だけれど
キスしたこともあるし大丈夫

不特定の人が容器やボトルを触ったりして気になるドリンクバー。しかし恋人といってもキスするって、案外不衛生かも知れない。気分とか考え方によって価値観が変わる不思議。

雨宮慈（静岡県）

ワンタン たんこぶ
拳で語るのが武士の生き方
肩を揉もうか 桃太郎

しりとりのかたちをとった語りの面白さ。自由自在で
前後委細構わず。

榎本圭子（大阪府）

草餅に添付のきな粉かけず食う
馬は荒野を駆け巡る

草餅にきな粉をかけるかかけないか。そういう自由
と、荒野を駆ける馬の自由は同じかも知れない。詩
の面白さ。

古都弥衣霧（大阪府）

全然意味がわからない
誠に不可解な
詩っぽい詩

くらたか湖春(滋賀県)

まことにおつしやる通り。現代詩は分らない。意味ではなく言葉の働きだけで表現しようとするためそういうことになる。しかし、自分の中のやむに已まれぬ必然性に迫られたとき真実が吐かれ、そしてそれは不思議に伝わる。口語詩句も同じく。

こういうとこなんだと思う

振られてもきちんと量っている

バスロマン

何が「こういうとこ」なのか。大きなショックを受けながら、一方では冷静に日常の家事をこなす自分がある。人間と人生の不思議さと面白さを噛みしめ

るところ。

中島丈多郎 (京都府)

蒲公英の近くで話すことじゃない

蒲公英の庶民的で無邪気な可憐さのような、俗事にかき乱してはいけない、優しく無垢なものがあるのだろう。

田邊 (茨城県)

口笛と呼吸の間しやぼん玉

口笛の集中力と、意識しない呼吸の自然さ。たしかに、この中間でないとしやぼん玉はできない。さりげないが鋭い観察力。

つちや
(東京都)

受け子でも出し子でもなく新社員

新入社員の初々しさがこういう感覚で見える。現代の在り方に考えさせられる。

はるかぜ
(大阪府)

組版の単位に

歯があることを知る

春は梯子を

つぎつぎ掛けて

組版の「1歯」は四分の一ミリを言う。細かい単位が律義につながって言葉が組まれる。そのようにさり気

なくも正確に春が組み上げられていく。

白鳥陽太 (神奈川県)

嫌いな人が手を洗っている

嫌いな人でも好きな人でも手は洗う。それは「事実」だが、それが言葉として一つながりの「文章」になると「場」ができ、「状況」が生まれる。言葉の持つ根源的な力。

口語詩句投稿サイト 72h

www.kougoshiku-toukou.com

ことばの**力**詩集

2026年6月 第68号

掲載作品 2026年4月投稿分

発行日 2026年6月1日

発行 公益財団法人佐々木泰樹育英会

東京都中央区明石町8-1 聖路加タワー40階

TEL.03-6278-5595 FAX.03-6278-5591

「ことばの力詩集」の命名は、榎本了壺氏によるものです

編集・デザイン＝アタマトテ・インターナショナル

AD＝榎本了壺 D＝坂口真理子

印刷・製本＝株式会社グラフィック

ISBN 978-4-910485-74-4

佐々木泰樹育英会の口語詩句事業

【第8回口語詩句賞】

賞の種類と賞金

大賞（原則1名）100万円 奨励賞（若干名）10万円

スケジュール

投 稿 期 間：2026年2月1日～2027年1月31日

選 考 期 間：2027年2月1日～3月5日

選考結果開示日：2027年3月18日

授 賞 式：2027年3月29日

【2027年度 口語詩句奨学金概要】

区分と給付額

中学生6万円 高校生12万円 大学生（大学院生含む）60万円

スケジュール

投 稿 期 間：2026年2月1日～2027年1月31日

選 考 期 間：2027年2月1日～3月5日

採用書類提出締切日：2027年3月12日

選考結果開示日：2027年3月19日

奨学金給付通知書授与式：2027年3月29日

※最新情報は本財団ホームページでご確認ください

<https://sasakitaijuikueikai.or.jp/>

後援

一般社団法人現代俳句協会

株式会社思潮社 現代詩手帖編集部



9784910485744



~~1920192000390~~

発行 公益財団法人 佐々木泰樹育英会